人生初の満員電車に、司は悲鳴を上げた。これほどまでとは思わなかった。

電車に乗り込んだ時点でそれなりに込み合っていた。

ラッシュを知らない司は、「こんなものか、これくらいなら平気だ」と高を括った。

しかし駅に止まるにつれ、人々が車内に雪崩れ込んでいく。さきほどの駅では、駅員が扉の前に立ち乗り込む客人生初の満員電車に、司は悲鳴を上げた。これほどまでとは思わなかった。

電車に乗り込んだ時点でそれなりに込み合っていた。

ラッシュを知らない司は、「こんなものか、これくらいなら平気だ」と高を括った。

しかし駅に止まるにつれ、人々が車内に雪崩れ込んでいく。さきほどの駅では、駅員が扉の前に立ち乗り込む客を無理矢理押し込んでいた。パンパンの押入れにさらに荷物を押し込んでいるようだった。

「地獄かよ……」

背の低い司は前後左右スーツ姿のサラリーマンに囲まれ、息ができなかった。どちらを向いても男性の大きな背中があり、壁の中に挟まってしまった感覚に陥る。

そんな中、一人の女性が壁の中に侵入してきた。大学生らしきお姉さんだった。

向かい合う二人。学校のロッカーに押し込められたような密着度合だった。

「天国かよ……」

男性の汗っぽい匂いから一転、女性の柔らかな甘い香りが鼻孔をくすぐる。

中学時代学年で一番小さかった司の身長は１５０にも満たない。よく中学一年と言われたり、小学生と間違われることもあった。昨日は小学生と間違われた。学校が私服登校のため余計に小学生感が出てしまうようだ。

前にいる女性は１７０前後と思われるスタイルだった。

必然的に司は女性の胸に埋もれるような形となった。

ブラウス越しでも隠し切れない大きな膨らみに包まれた司は、徐々に焦り始める。

女性の柔らかさを全身に体感する中、ある部分が反応し始めていた。

絶対にバレル……。

意識を逸らそうとするも、すればすれほど、女性が気になってくる。

目には大きな胸、鼻では甘い香り、耳では女性の息遣いが届く。

駅に着き、再び人々が雪崩れ込んでくる。

男性の壁がさらに押し寄せ、司と女性の密着度合がさらに増す。

司はもう限界だった。

「ぅぅ」

堪らず、司の息子がそそり立つ。

「あぁ」

司は思わず感嘆の声を漏らす。

勃起した息子がそのまま女性の太腿の間に収まってしまった。

もう司にはどうしようもなかった。恥かしさが司を支配する。

揺れる車内が司をさらに刺激する。

精液が徐々にせり上がっていくのがわかった。

今度は絶対に我慢しなくては。

我慢しようとすればするほど、ある欲望が浮かぶ。

このまま腰を振ったらどれだけ気持ちいいのだろうか……。

司は生唾をゴクリと飲む。

衝動。

してはいけない。

こんなことやってはいけない。

頭ではわかっている。だが……。

司は理性を失った。自分の物を女性に擦り付ける。

司が行動を起こそうとした瞬間だった。

「大丈夫だからね」

優しい声が鼓膜を振るわす。

ふいに目線をあげると、女性の優しい微笑みがあった。

「気にしなくていいよ」

囁くように女性が言う。

「お姉さんは平気だからね」

子供をあやすような甘い声音。

司の心が満たされていく。母親に甘えているような感覚。

「ごめんなさい……」

司の口から謝罪の言葉が自然と漏れる。

男性のモノを押し付けられても、何もなく受け止めてくれる女性に申し訳がなかった。

女性は何度も頷いた。うんうんわかった、と優しく受け入れているようだった。

しかし司の息子の興奮が収まることはなかった。

精子が尿道から溢れ出す。まるでお漏らしをしているように溢れ出していく。

長い長い射精感が続く。

全部出し切ったところで、女性がふいに司を見つめる。女性は太腿のひんやりとした冷たさを感じていた。

司は何も言えなかった。

電車はそのまま駅へと到着した。大量の人々が降りていく。

「おいで……」

女性は司の腕を掴み、そのまま電車を降りていった。